

経済マンスリー

[原油]

原油市場を取り巻く環境(10月)

1. 原油価格の推移

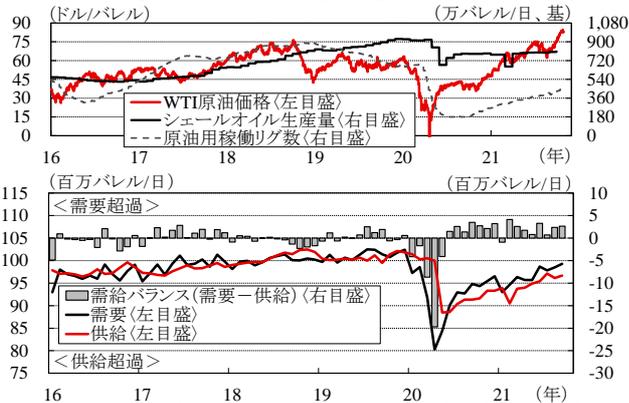
原油価格(WTI期近物1バレル当たり)は、10月4日のOPECプラス閣僚級会合で、協調減産の規模縮小(増産を意味)が更に進められるのではないかと、の事前見通しに反して従来の計画が維持されたことや、欧州の天然ガス不足や中国・インドの石炭不足などを受けてこの先の原油需給は更に引き締まっていくとの見方が強まったことなどを背景に、足元では約7年ぶりの水準となる80ドル台で推移している(第1図・上)。

2. 需給の動向

EIA(米エネルギー情報局)の月報によると、9月の世界の原油需要は日量9,929万バレル、供給は同9,667万バレルで、262万バレルの需要超過となった(第1図・下)。昨年6月以降、略一貫して需要超過が続いているが、背景にはコロナ禍以降の需要拡大を睨みつつ、供給拡大は慎重なペースに止まっていることが挙げられる。まず、OPECプラスの協調減産の規模縮小(=増産)は、飽くまで需要拡大ペースに準じた範囲に止まっている点は注目される。ナイジェリア等が計画通りに増産できず供給実績が計画を下回っていることが指摘されるが、一義的には大きな生産余力を持つサウジアラビアが最終的な調整役として機能しているとも解釈できる。また、米国シェールオイル生産についても戻りは極めて緩慢なペースのままである。足元の原油価格はシェール油田の平均開発コストの上限である58ドル(今年3月のダラス連銀調査)を大きく上回っており、リグ稼働数なども復調しつつあるが、シェール油田での労働力不足やバイデン政権の気候変動対策への積極姿勢もあって、生産増に大きくシフトするには至っていない(第1図・上)。

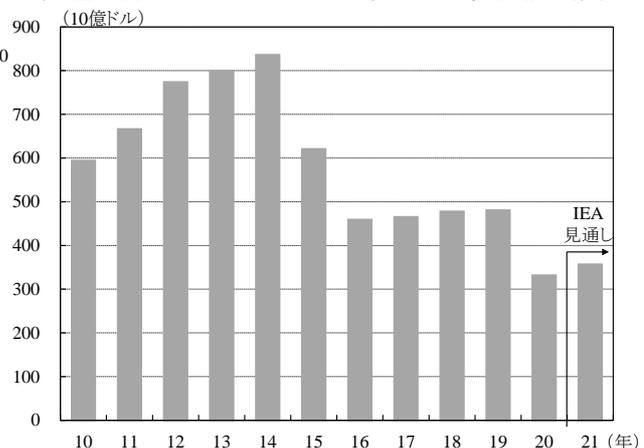
世界的な脱炭素化の潮流とこれに伴う将来的な供給抑制観測等を受け、石油産業への投資は全般に抑制気味であり(第2図)、足元では中長期的な供給力に懸念が台頭している。石炭の代替燃料としての需要も加わっていることもあり、当面原油には価格上昇圧力が強い状況が続こう。

第1図: 原油価格、米国のシェールオイル生産量、原油用稼働リグ数及び世界の需給バランスの推移



(注)シェールオイル生産量は9月末までの月次、原油用稼働リグ数は週次データ。
(資料)EIA(米エネルギー情報局)、Bloombergより三菱UFJ銀行経済調査室作成

第2図: 世界の石油・ガス(上流部門)向け投資額の推移



(資料)IEA(国際エネルギー機関)資料より三菱UFJ銀行経済調査室作成

照会先：三菱 UFJ 銀行 経済調査室 中山 健悟 kengo_nakayama@mufg.jp
鷹巣 里奈 rina_takasu@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当行はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。